



童話の部
優秀賞

2023

第40回 日産 童話と絵本のグランプリ

らくやきさんころんだ

文月 レオ

4年1組の5時間目は図工のはずだった。それなのに先生が「よし、特別大サービス！ドッジボールの時間にしよう！」なんて言うものだから、クラスでかん声があがった。

「先生さいいこうー！」
りようたの声が教室中にひびく。先生がつてば、子供はみんなドッジボールが好きだと思っている。わたしは、のろのろと体育館まで歩き、ドッジボールのコートに入った。

そういえば来週からはじまる「らくやき大会」のテーマはなんだろう。年一回、らくやきという焼き物の作品を、図工の授業でつくる。全校生徒に、ねん土のかたまりがくばられる。それをこねてひねり出して形にしていく。次にかわかって色をつけ、最後にかまに入れて焼く。すると石のようにかたくなり、色もあざやかに変化するのだ。毎年、かまから出された作品と向き合う時は、どきどきする。変化もおもしろい。そんなことを考えていると

「さおり！あぶない！」
急に名前をよばれ、おどろいて顔をあ

げた。その瞬間、せなかにドッジボールがあたった。
「さおりは、ぼやつとしてるからな。」
りようたの声だ。ふりむくと、りようたはもう、次のこうげきにむけ、体勢をかえている。

りようたは、ドッジボールをむね全体で受ける。そして投げる。また受けては、投げる。ボールの方から、りようたのむねにとびこんでいき、自由にはなたれているように見えた。

「いいな。あんなふうにはなたら。わたしは、外野に向かいながら、りようたの姿をじつと見ていた。

らくやき大会の日、わたしは、はりきつて登校した。先生が言った。

「さあ、今年の4年生のテーマは『運動する人』だ。どんな運動でもいいぞ。からだの動きをよく観察してつくるんだ。友達にポーズをとってもらってもいい。」

わたしはがっかりした。たいいの運動は苦手だ。そのときふと、りようたの姿がうかんだ。そうだ、『ボールをなげる人』にしよう。土をこねだした。

ひんやりした土の感触がきもちいい。手の中でかたまりが、みるみる形を変えていく。

「ちぎるのはやめて、ひねりだすんだ。そうそう！」

みんなの間を先生がいたりきたりし、アドバイスをしている。わたしは聞きながら、うでとボールの部分を大きくひねりだした。ボールをはなつまでの様子、頭の中で何度もイメージする。ボールはドッジボールより小さめでバランスよく、野球ボールということにすればいい。よし良いかんじだ。

ふと、りようたを見ると、りようたの作品は早くも人の形になっている。なんだろう。左足があがり、右うでがあがっている。

「それ、なにしているところ？」
わたしが聞くと、りようたはちよつと首をかしげて言った。

「んー、おどつている人？」
こつちが聞いているのに、とわたしは笑った。

できあがった作品は、一週間かわかした。それから専用の絵の具で色を

ぬつた。

その日の下校時間、校門を出て数分歩いたところで、わたしは忘れ物に気づき学校にもどった。

ろうかにはもう、人のすがたがない。放課後の学校というのは、どうしてこんなに静かなのだろう。わたしは不安な気持ちでうちけすように、息をはずませ階段を駆け上がり、いきおいよく教室の戸を開けた。

ぎよつとして足を止めた。気のせいだろうか。うしろのロッカーのあたりで、とつぜん何かが動いた。ロッカーの上には、みんなのらくやきの作品がならんでいる。かまに入れる前に、一晩かわかしている状態だ。窓は、しめられていて風が入った様子はない。わたしは、背中からランドセルをおろし、自分の席の机の上に置いた。

そのとき、うしろでまた何か動く気配がした。ふり返ると、何もなし。おかし。急にこわくなってきた。早く家に帰ろう。わたしは急いでノートをランドセルに入れた。

そのときだ。視界のはしで、たしか

にらくやきが動いた。ふりかえり、らくやきをじつと見た。だれかの作品『飛ぶ人』の右足が、さつきより大きくあがつている気がする。近づいて、わたしの作品『ボールをなげる人』を見た。すこしだけ腰がさがっているし、ボールを持つ手があがつている。わたしは、ぼんやりつたつたまま、目をこすつた。

こんなことってある？わたしが、らくやきから背を向けるとらくやきが動き、ふり返るとらくやきは動きをとめる。これって……！わたしは、一年生のころに友達とよくした遊びを思い出した。

「だーるまさんが、ころんだ。」
わたしはらくやきに背を向けて、つぶやいた。そして、いきおいよくふり返った。
「あつ！」

らくやきが、グニヤリ…とした後、あわてたように動きをとめた。信じられない。やつぱり『だるまさんがころんだ』だ！
わたしは胸をドキドキさせながら、ふたたび、らくやきに背を向けた。こ

んどは教室中に聞こえるように声をはりあげた。

「だーるまさんが、こーろんだ！」
すばやくふり返り、らくやきを見つめる。おどろいた様子で動きをとめるらくやきを見て、わたしはがまんができずにふきだした。笑いながら、らくやきを指さす。

「えつと、そつちの『飛ぶ人』、うごいたよ。」

本気で遊びたくなった。わたしは、『だるま』の部分を『らくやき』に変え、歌うように声を出す。

「らくやきさんが、こーろんだ！」
ふり返るとまた、らくやきの姿勢が変わっている。

あれ？わたしのらくやきが、ボールを持つたうでを大きく前につきだしているのではないか。まるでだれかに向かってボールを投げようとしているようだ。

わたしは、おもわずかけより、らくやきの顔をそつとのぞいた。まるいベースに大きすぎる目と、ふくれたくちびるが、きゆうくつに配置されている。――ほんとうに、投げようとしている？

わたしは心の中で話しかけた。期待と不安が入りまじった気持ちで席に戻り背を向ける。

「らくやきさんが、こーろんだ！」
ふりかえった時、何かがとんだのが見えた。やつぱり、投げた！わたしのらくやきが、ボールを投げた！
「そんな、うそでしょ。」

わたしはいそいで、ボールがとんだ方向に目をはしらせた。

――わつ！
ボールが、りようたのらくやきのおしりにくつついている。わたしはらくやきにかけよりボールに手をのぼした。そのときだ。

「忘れ物？あつたらすぐに帰きなさい。」
先生の声とろうかを歩く音が聞こえて、教室の戸がガラツと開いた。わたしは、ぎくつとして思わず手をひっこめた。

「は、は、はーい。」
あわててランドセルを背負い教室をとびだした。

翌日の夕方、全校生徒のらくやきが、かまから出されて運動場にしかれたブルーシートの上にならべられた。みんな

いる気がした。

「きみが、ボールを投げたからじゃないか。」

わたしは口をとがらせた。窓からやわらかな風がふいてきてわたしのほおをそつとなでた。

――投げてみたくてね……
らくやきからそんな言葉が聞こえた気がした。

なが、自分の作品のもとへ走っていく。

わたしは自分のらくやきが、ボールをもつていないことに気づいた。あたりをぐるりと見わたした。りようたが、自分の作品のまえで首をかき上げている。

「あれ、なんか変なのがくつついているぞ。」
きよとんとするりようたのまわりに、クラスのみんながあつまってくる。わたしも、おそろおそろ近づいた。りようたのらくやきは、おしりにボールをくつつけて、片手と片足をちぐはぐにもちあげている。

「あ、これボールだ。」
「あれ？さおりちゃんもボールじゃない？」
クラスのみんなが口々にしゃべる。

「そうだね。こつちにくつついたんだね。」
わたしはもごもごこたえ、うしろめたい気分、つばをぐくりとのみこんだ。りようたはしゃがんだまま自分のらくやきをまじまじと見つめ、突然ふつとふきだした。

「じゃあさ、これ『おどる人』じゃなくて『ボールがあたつた人』だ」と言う
と、りようたは立ち上がり、おどけたように右手と左足をあげてみせた。

審査員コメント

何よりも「らくやき」という素材が新鮮でした。そのらくやきと「だるまさんがころんだ」の遊びをする場面が、ユーモラスで楽しいですね。ファンタジー世界への入り口と出口が明確ではありませんが、この作品では、かえってそれが自然な感じもしました。

吉橋 通夫

文月 レオ

香川県

受賞のことは

どこかでどなたかの貴重な時間をいただき、私の物語を読んでいただく。それだけで十分有難いことなのにもかかわらず、評価をいただきました。この感謝と感動を、かみしめ味わい、次の作品の肥やしにさせていただきます。いつの日か童話作家となり、子供達が私の描く物語を読み「おもしろい」と感じてくれたら。これほど幸せなことはありません！